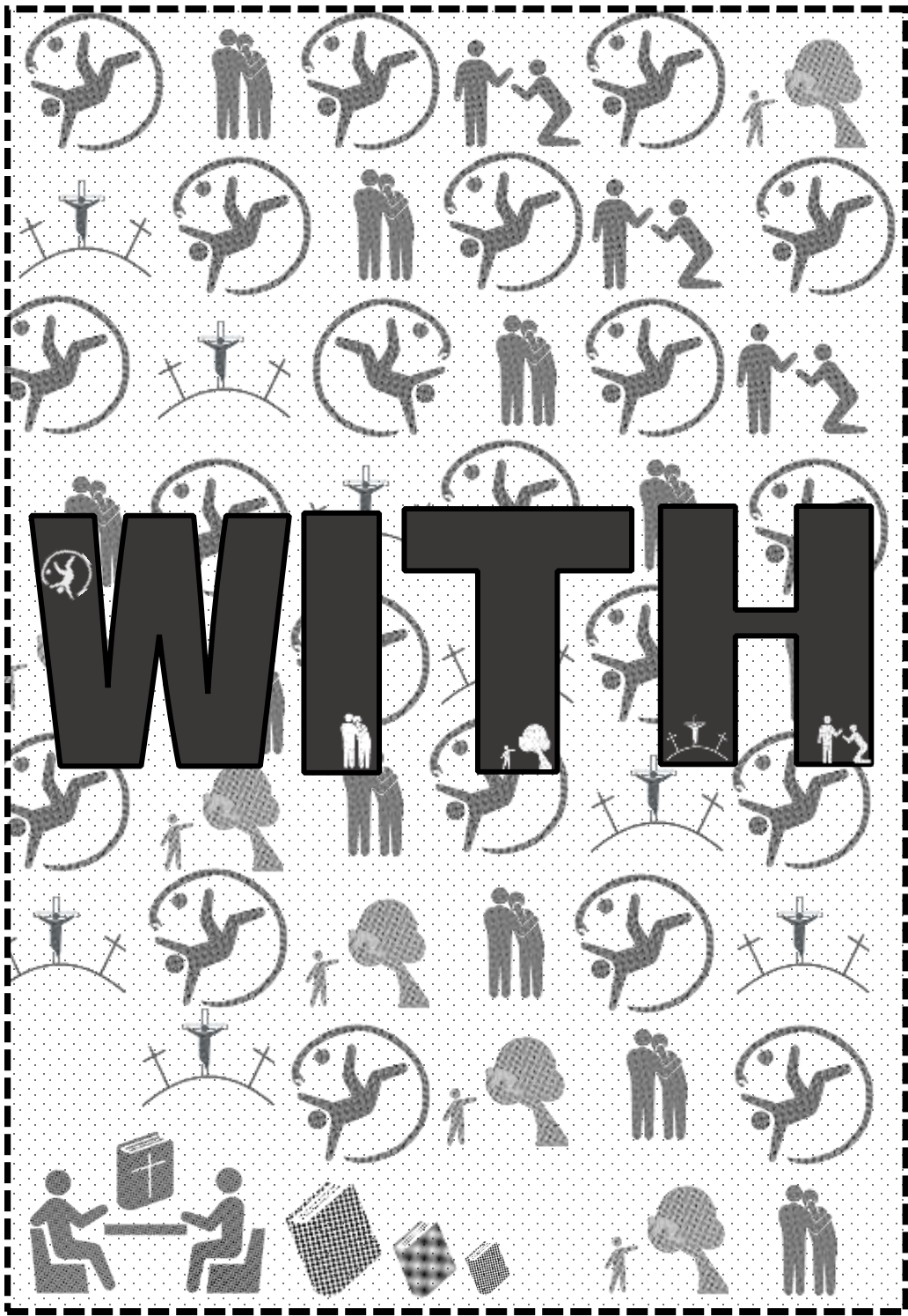


WITH



この本は、友人と一緒に聖書を読みながら、キリスト教について知るためのものです。

「聖書を読んだことがない」「教会に行ったこともない」「キリスト教について、ほとんど知らない」というような人たちが、親しいクリスチャンの友人と一緒に聖書を開きながら、短い時間でキリスト教のエッセンスを知ることができるように作られています。ただ読んで教えられるだけではなく、自分で考えながら読み進めて行けるようにも工夫されています。

ぜひ肩の力を抜いて、リラックスして、心を開いて、一緒に読み、一緒に考えてみましょう。

「WITH」というこの本のタイトルには、いくつかの意味が込められています。

友人と一緒に聖書を読むこと。With your friend.

私たちの生活している世界との関係。With our world.

聖書の神は、「私たちとともにおられる神」であることを知ること。God with us.

この本を通して、キリスト教のことが、そして私たちとともにおられる神のことが、より身近に感じられたら嬉しく思います。

K G K 主事 吉澤慎也

目次

はじめに キリスト教と聖書 p. 2

キリスト教について理解するためには聖書を読む必要があること、聖書がどのような本であるかを説明しています。

第1章 父なる神：ルカの福音書 15:11-24 p. 4

聖書の神は父なる神であり、神は人間との関係を回復したいと願っておられることを学んでいきます。

第2章 人間の罪：創世記 3:1-19 p. 10

神のかたちとして創造された人間は、罪を犯し、その結果として、神との関係が損なわれ、さらに他者との関係、被造物との関係までが影響を受けたことを学んでいきます。

第3章 約束された救い主：ルカの福音書 19:1-10 p. 16

罪によって損なわれた関係を回復するために神が遣わされた救い主が、イエス・キリストであることを学んでいきます。

第4章 イエス・キリストの死：ルカの福音書 23:32-49 p. 22

イエス・キリストの十字架による死とその意味について学んでいきます。

第5章 イエス・キリストの復活：ヨハネの福音書 20:24-29 p. 28

イエス・キリストが死から復活したこと、なぜそれを信じる事が出来るか、そしてその意味について学んでいきます。

おわりに p. 34

イエス・キリストに対する信仰について考えます。

このブックレットでは「新改訳聖書第三版」から聖書箇所を引用しています。

はじめに キリスト教と聖書

キリスト教のイメージ

あなたはキリスト教について、どのようなイメージを持っていますか？

「明るい」「暗い」「荘厳な」「美しい」「堅苦しい」「欧米の」「こわい」などなど…。

インターネットで調べてみると、キリスト教に対して良いイメージを持っている人もいれば、悪いイメージを持っている人もいることがわかります。一般的な良いイメージとは、「讚美歌は心が洗われる」「神の愛が世界に広まっている」「聖書は良い本」「結婚式は教会で」「クリスマスは楽しい」というようなものです。逆に悪いイメージとは、「そもそも宗教に抵抗がある」「執拗に勧誘してくる」「わかりにくい」というようなものです。

聖書

キリスト教について、表面的なイメージだけの理解にとどまらず、正しく理解するためには、聖書を読む必要があります。

聖書は「永遠のベストセラー」と呼ばれてきました。そのメッセージは長い年月を経ても色あせず、現在でも世界中で多くの人々に愛読されています。2015年は全世界で3,400万部以上頒布され、また2012年時点で2,551原語に翻訳されており（日本聖書協会より）、他の書物とは比べ物になりません。「狭き門」「豚に真珠」など多くの名言や格言を生み出し、数々の文学作品に影響を与えてきた書物です。「もしあなたが無人島で暮らさなければならぬとして、ただ一冊の本を持って行けるとするならば、どんな本を持って行きますか」という質問に、多くの人が「聖書」と答えています。

しかしそんな聖書も、本当に読まれ、理解されているのかと言えば、必ずしもそうではありません。「とにかくページ数が多すぎて」「いきなりカタカナの名前がたくさん出てきて」とか「難しくてよくわからない」などの理由で、一度は手にしたけれど途中でやめてしまった、という場合も少なくないようです。

聖書がどのような書物なのか、少し紹介したいと思います。

聖書は旧約聖書と新約聖書に分かれています。旧約とは「旧い契約」、新約とは「新しい契約」という意味です。旧約聖書が創世記からマラキ書までの39巻、新約聖書がマタイの福音書からヨハネの黙示録までの27巻、全66巻の書物をまとめたものが聖書です。その中には、歴史の記録もあれば、手紙もあります。詩の部分もあれば、法律の本のようなところもあります。オペラにでもなりそうな詩劇といったものさえ見当たります。それら多様なジャンルに渡る文書がまとめられています。

いろいろと違っているのはジャンルだけではありません。各書物の著者、書かれた状況、目的なども、非常にバラエティに富んでいます。著者は、ユダヤの王から、医師、政治家、羊飼、音楽家、学者、漁師や取税人など、40人以上の人物です。最初の書物の執筆から最後の書物の執筆までは、千五百年以上の時間が経過しています。扱う歴史は、世界のはじめからおわりまでをカバーする壮大な書物です。ところが不思議なことに、聖書は一見このような寄せ集めの本であるにもかかわらず、非常に内容の統一がとれているのです。

正統的なプロテスタント教会では、いずれの教団教派であっても、この聖書を「神のことばとして権威をもった書物」としています。

聖書のメッセージ

聖書の中心的なメッセージは、イエス・キリストです。聖書はイエス・キリストについて書かれている本です。イエス自身が「聖書が、わたしについて証言している」(ヨハネ 5:39)と述べています。

神による天地創造と、人間が罪を犯してしまう物語から始まる旧約聖書には、イスラエル民族の歴史が描かれ、そして将来、救い主(救世主、メシヤ、キリスト)が来て、全世界を救うという約束が記されています。

新約聖書には、約束された救い主がイエスであること、そしてそのイエスの教えと働き、十字架の死と復活、またその後続く教会の拡がり記されています。終わりのときに、イエスが再び来られ、神の救いが完全に実現することが述べられています。

「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」(IIテモテ 3:15)とあるように、聖書はキリスト教の信仰を持つためには欠かせない書物なのです。

これから一緒に聖書を読みながら、キリスト教について学んでいきたいと思います。

第1章 父なる神

はじめに

聖書は私たちに、神が存在していることを教えています。けれども、「神がおられる」というと賛成する人もいれば、「神などいるはずがない」と反対する人もいます。2000年に行われた「世界価値観調査」によると、「神が存在する」と答えた日本人の割合は35%、「神が存在しない」と答えた日本人の割合は31.6%でした。そして33.4%の日本人は、「わからない」と答えています。

漠然とした思いであっても、この世界の背後には神がいるのかもしれないと感じている人はそれなりにいるようです。確かに人間の心の中には「神」の概念があります。「神」と呼ぶことができるような存在を思うことができるのです。実際、世界中どこに行っても神を信じる人々がいます。神という存在を思うことは、人種、言語、文化の違いを超えた普遍的な現象なのです。

しかし、ひとくちに「神を信じる」と言っても、その内容にはかなり違いがあります。例えば、日本の社会では人間も「神」になります。何か普通でないもの、人間の力を超えているように思われるものがあれば、自然であれ、生き物であれ、神として祭られることがあります。有名な「千と千尋の神隠し」という映画には、八百万の神々が登場します。最近では、他人より優れて秀でたあり方を、「神」と表現することも多くなりました。ですから、「神の存在を信じる」ということ以上に、その神とはどのような神なのか、そしてどのような神を信じているかが大切なのです。聖書は「何でもいいから、神を信じなさい」とは勧めてはいません。

◆ あなたは神がいると思いますか？どのようなときに、そう思いますか？
また、あなたのイメージする神様とは、どのようなお方ですか？

- A. いる
- B. いない
- C. わからない

聖書の神

人間の側から思い描く神の姿は、千差万別です。それでは、聖書は神をどのようなお方として示しているのでしょうか。

聖書はまずその冒頭で「初めに、神が天と地を創造した。」(創世 1:1) と、神のことを天と地のすべて造った存在として紹介しています。

聖書によると、宇宙とその内にある一切のものが神の意志によって、しかも一定の秩序をもって造られました。神だけが永遠の存在であり、無限の存在です。神以外のものはみな神によって造られた被造物ですから、時間的にも空間的にも有限です。ですから神によって造られた被造物を神とするのは間違いです。すばらしい自然を見て、それが神であるかのように錯覚することがあるかもしれませんが、自然のすばらしさは創造主である神のすばらしさを表すものです。また、どんなにすばらしい人物であっても、あくまでも神によって造られた存在にすぎず、創造主である神を超えるものではありません。

イエス・キリストは、この神のことを強烈に意識していた人でした。イエスにとって神とは、遠い国の聖なる偉い存在ではなく、常に言葉を交わすことのできる自らの父に他なりませんでした。イエスと同じ時代に生きていた人々は、神はすべての人間を裁く存在であり、すべてにおいて完璧でなければその神の基準を満たすことはできず、神に近づくこともできないと考えていたのですが、それに対してイエスは、神をもっと身近で親密な「アバ、父」(マルコ 14:36) —日本語では「お父ちゃん」「おとう」「おとん」のようなニュアンス—として人々に提示しました。このイエスが紹介した父なる神について、聖書から学びましょう。

ルカの福音書 15 章 11～24 節を読みましよう

この物語は、イエスが語ったたとえ話です。このたとえ話に登場してくる「父」とは、父なる神のことを表しています。

父のところにはあり余るパンがあり、そこで暮らしていた息子はその富を十分に与えられていました。

語句説明

- ・ 「財産の分け前」(12)：二人兄弟の場合、父の遺産の3分の2が兄に、3分の1が弟に与えられる(申命 21:17)。遺産分配は通常は、父の死まで行わないものだった(生存中に分けたこの場合は、兄息子の分は父の死までは父の手中にあり続けたと考えられる)。
- ・ 「身代」(12, 30)：家の財産。資産。
- ・ 「放蕩」(13)：自分の思うままに振る舞うこと。やるべきことをやらず、飲酒や遊びにうつつをぬかすこと。
- ・ 「豚の世話」(15)：「豚を飼うものはのろわれる」と教えられていたため、ユダヤ人には禁じられていた仕事。
- ・ 「いなご豆」(16)：豚の飼料、貧しい人々の食物。飢饉のときだったため、豚にはいなご豆のさやだけが与えられたのかもしれない。
- ・ 「雇い人」(17, 19)：普通の奴隷は、ある意味では家族の一員だったが、雇われ奴隷は一日ごとの契約で、あとは解雇されることもあった。もちろん家族の一員にされることもなかった。
- ・ 「口づけした」(20)：直訳では、何度も何度も口付けした、とある。
- ・ 「着物」「指輪」「くつ」(22)：着物は栄誉をあらわし、指輪は権威をあらわしている。くつは奴隷ではなく子であることをあらわしている。

質問

1. 弟が父に『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言ったときに（12節）、父はどのような気持ちになったと想像しますか。また弟はなぜこのようなことを言ったのだと思いますか。
2. なぜ弟息子は父のところに帰ろうと思ったのだと思いますか。
3. 父親は帰ってきた弟息子をどのように迎えましたか。その言動から、父の弟息子に対するどのような思いがわかりますか。

おわりに：神と人間の関係の回復

イエスは、神と人間関係を、父と息子の関係にたとえました。しかもその息子は、父の元を自ら離れていった息子です。けれども父なる神は、息子である人間が神の元へと帰ってこようとするときに、それを拒むのではなく、温かく迎え入れてくれるのです。

イエスの示した神とは、このような父なる神です。ここから二つのことを考えたいと思います。まず一つ目は、人間は、父なる神を認めず、その元を離れているような存在である、ということです。これはどういうことでしょうか。第2章でさらに詳しく学びたいと思います。

もう一つは、父なる神は、人間が自分の元に戻ってくるのをずっと待っておられる、ということです。その関係は回復される可能性があるのです。

イエスは、神と人間との関係が回復されることを願って、このようなたとえ話を語りました。聖書の神は、私たち人間にとって「お父さん」のような存在です。そして父なる神は、息子である人間との関係が回復することを心から願っておられるのです。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

わたしの物語—父なる神

東京家政学院大学 2013 年卒 Hさん

2007 年 6 月 3 日 受洗

「イエス・キリストを信じます」と告白して 10 年が経った。あの頃高校 1 年生だった私は、暗いトンネルの中にいた。正直にいうと死にたいと思っていた。幼い頃親が離婚をして父子家庭で育ったこと。経済的に貧しかったこと。高校生に上がるとクラスに友達ができなかったこと。いろんな傷はあるけれど、どれも決定的な理由ではなく、「何のために生きているのか」がわからなかった。一番求めている問いに答えが無い。それがつらかった。そう考えると、たとえ仲の良い家庭で育ったとしても、裕福な生活を送れても、成績が良く友達が沢山いたとしても、この問いへの答えにはならない。これまでに幸せなときはあったけれど、ある日突然状況が変わるということも経験した。何かにすがろうとしても、それらは絶対に信頼できるものではなかった。それに、結局みんな自分が一番かわいいと思っている。自分の痛みも、苦しみも悩みも、全部自分で引き受けていかなければならない。人の痛みだって、本当の意味で知ることではできない。そう思うと、人間は、人生は、なんて孤独なんだろうと悲しかった。

私には二人の姉がいる。姉たちも相当心病んでいた。そんな状況のまま姉二人をアメリカ留学へ見送った。でもあるとき突然電話で「お姉ちゃん神様を信じたよ」と言われた。そして帰国してから、熱心に聖書の神様について語る姉の姿があった。その目は真剣だったし、輝いていた。姉たちが教会に通うようになって、家には賛美と祈りの声が響くようになった。でも私は、天地創造の「父」と呼ばれる神様なんて知らずに生きてきたし、姉たちが洗脳されているのではないかと疑っていた。けれど、姉は生き生きとしていたし、二人を通して家庭の中にコミュニケーションの回復が起こったのも事実だった。何より、自分が満たされようとする生き方から、他者の幸せを願い生きようとする姉の姿は私の胸に焼き付いた。

高校 1 年生。生きる意味を見出せなかったとき、傍にいてくれたのは姉だった。そのとき、初めて自分から聖書の神様について教えて欲しいと求めた。姉の内に働く神の愛に希望を見出していたのだと思う。姉は、神様がどんなお方か、どのように信じたのかを丁寧に話してくれた。そして、私にいのちを与えたのも、生きる意味を与えるのも、このお方以外にいないと伝えてくれた。死を願っていた私に、「私は息子のいのちを与えるほどにあなたを愛している」と痛みながら私の名を呼ぶ天の父がいたことを知った。素直に、信じたいと思った。「父なる神様」と初めて祈ったとき、もう死にたいとは思わなかった。「待っていたよ」と神様が私の心に触れてくださった瞬間だった。

第2章 人間の罪

はじめに

あなたは、世界のはじまりをどのように考えていますか。

古事記の冒頭は「天と地がはじめて分かれたとき、天界の高天原（たかまがはら）に生まれた神の名は、天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巢日神（たかみむすひのかみ）、次に神産巢日神（かむむすひのかみ）。」と記します。天と地が分かれたとき、神は生まれたのです。しかし聖書はこのように記します。「初めに、神が天と地を創造した」（創世 1:1）。最初に世界があったのではなく、神が先におられ、世界は神によって造られたのです。創世記 1章には、神が、光、陸と海、植物、太陽と月、魚、鳥、動物、そして人間を造られたと記されています。つまり、私たちは神によって創造されたのです。

- ◆ さて、あなたは自分自身に点数をつけるとしたら 0～100点のうち何点をつけますか？

自分がどのような存在であると考えているかによって、私たちの自分自身に対する評価は変わってくるものでしょう。

聖書には「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」（創世 1:31）とあります。神は、自然、動物、人間について、100点満点だと言われたのです。ですから、あなたも、非常に素晴らしい存在として造られています。

神のかたちとして造られた人間

あなたは、宗教活動をしているネコを見たことがありますか。おそらく見たことはないでしょう。しかし世界を見渡すと、あらゆるところに寺院、神社、仏閣があり、多くの人が祈りをささげています。宗教心を持っている点において、人間は他の動物とは違う存在だといえます。

ではなぜ人間は宗教心を持っているのでしょうか。そのことについて聖書は、神が人間を「神のかたち」に創造されたからだといえます。「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」（創世 1:27）とあります。神は人間を「神のかたち」に、つまりご自身の性質に似せて造られました。それゆえ、人間は神との交流を求めるといふ宗教心を持ち、知性、感情、意志といった人格をもつ存在とされたのです。

また、「神のかたち」には、神の代理人という意味合いもあります。たとえば、外交官が他の国において自分の国を代表してその意志を伝え、それを反映した行動を取るように、人間は神によって造られた世界（被造物）の中で、神の意志を伝え、それを反映した行動を取るのです。「地を従えよ。……すべての生き物を支配せよ」（創世 1:28）と書かれています。これは被造物に対して人間が好きないようにしていいということではなく、神の存在と意志を反映するように、造られたすべてのものを治めることを意味します。

神とアダムとエバ

神は初めの人間としてアダムを造られました。そして神は彼に対してこう言われました。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べて良い。しかし、善悪の知識の木からはとって食べてはならない。それをとって食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」（創世 2:16-17）人間には、「園のどの木からでも思いのまま食べて良い」という、とても大きな自由が与えられました。ただし、善悪の知識の木から食べることは許されませんでした。これは、神と人間の間には大きな自由があるが、同時に越えてはいけない一線があることを意味します。また、この木はそれを見る度に神との関係を思い出して感謝するために、まるで結婚指輪のように与えられたものでもありました。この言葉は神と人間が交わした重要な約束でした。

その後、神は「人が、ひとりであるのは良くない」（創世 2:18）と言われました。世界は良いものとして造られていましたが（創世 1:31）、ひとりであるのは良くなかったのです。そして神はエバを造られます。エバと出会ったアダムは深く喜びました。人間は神と、造られた世界と、そしてお互いとの関係のために、造られたのです。

アダムとエバの二人と神との関係は、親しく、愛にあふれていました。しかし、そのような素晴らしい神と人間との関係も、ずっと続いたわけではありませんでした。アダムとエバがしてしまったある出来事がきっかけで、神と人間との間に、引き返すことのできない深い亀裂が生じてしまうのでした。それはどのような出来事だったのか、聖書を読んでみましょう。

創世記 3 章 1～19 節を読みましょう

神は、世界とそこにあるすべてのものを、非常に良いものとして造られました。その中でも、神のかたちとして造られた人間は、特別な存在です。神は、アダムとエバをエデンの園に置かれました。

そして創世記 3 章では、そのアダムとエバに対して、誘惑の手が伸びます。神に敵対し、神の計画を破壊しようとする存在（悪魔とかサタンと呼ばれます）が、蛇を介して、彼らをそそのかすのです。

語句説明

- ・ 「いちじくの葉」(7)：五つに裂けた大きな葉。
- ・ 「ちり」(14, 19)：地表の細かい土ぼこりをあらわし、無価値なもの、非力なもの、の比喩に用いられる。
- ・ 「いばらとあざみ」(18)：荒れた土地のしるし、人間を苦しめる状況。人間のために整えられていない、むしろ挑戦的な状況。

質問

1. 1～7 節において、彼らはどのようなことをしましたか。2 章 16～17 節と比較しましょう。
2. 8～13 節では、彼らはどんなことをしていますか。これらのことから、彼らの犯した罪の本質とは、どのようなものだと思いますか。またこのとき、神はどのような思いを抱いたと思いますか。
3. 16～19 節には罪の結果としてもたらされた悲劇が描かれています。それはどのようなものですか。特に深刻なことは、どのようなことだと思いますか。

おわりに：罪の結果

アダムとエバは神との約束に違反をしてしまいました。人間は神の前に罪を犯したのです。それゆえ、かつては神と顔を合わせて一緒に過ごすことに深い喜びがあったにもかかわらず、二人は神を恐れ、神の前から隠れたのです。こうして神と人間との関係は損なわれました。このことは、アダムとエバとの関係（人間関係）にも影響を及ぼしていきます。さらには、土地が「のろわれてしまった」（創世 3:17）ことから、人間と神の造られた世界との関係にも影響を及ぼし、罪を持った人間は被造物を適切に治めることができなくなってしまいました。

罪の結果として、人間にもたらされた最も深刻なこと、それは「死」です。聖書全体を見ると、死には三つの側面があるとわかります。①肉体的な死、②霊的な死、③永遠の死、です。肉体的な死とは、いつか心臓は止まりこのからだは死ぬということです。霊的な死とは、いのちの源である神に背を向けて離れた結果、神との関係が損なわれ、神との交わりを失ったということです。永遠の死とは、神との交わりを失ったまま肉体が死ぬときに迎える、永遠の世界における死です。罪の結果、例外なくすべての人間はこの三つの死をまぬがれることはできない、と聖書は語ります。

人間は非常に良いものとして造られながらも、その本来あるべき姿ではなくなってしまったのです。アダムに続く私たちはみな、同じ罪の性質をもって生まれてきます。ですから人間は、そのままでは、創造主である神をお父さんとして慕うことをしません。そのため、他者を愛し、被造物を正しく治めるという本来の生き方に、どうしようもない難しさを感じるのです。それでは神は、このような人間を救うためにどうされたのか、第3章で学びたいと思います。

今日の学びの感想を分かち合いましょう。

わたしの物語—人間の罪

愛知県立総合看護専門学校 1992年卒 Tさん

1992年3月29日 受洗

聖書を読むようになってから、いろいろなところに出てくる“罪”という言葉に対して、私はいつも、いやな気持ちを持っていました。「また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。」(マタイ5:22)という個所を読むと、『『ばか』って言わないなんてできるわけがない。なんて無理なことを言うのだろう。』と思い、罪のリスト(?)のような個所(マルコ7:20-23、ローマ1:29-31、ガラテヤ5:19-21)を読むと、「良くないのはわかるけど、自然にやっていることまで罪と言われて、どうしろっていの?」と、腹立たしく思っていました。

私は信じる前から、自分なりの正義感を持ち、良心に従って生きようとしていたため、罪人扱いされることが癪にさわりました。それは聖書で言う罪を“犯罪”という意味だと思っていたからでした。後になって、私が正しく生きたいと思っていたのは、自分の中にある罪悪感から免れ、人と比較して自分の方が正しいとするとときに得られる、わずかな安堵感と優越感のためだったことがわかりました。

聖書が私たちに罪を認めるように教えているのは、責めたり落ち込ませたりするためではなく、赦しを求めさせるためだったと、かなり時が経ってからわかりました。気付いていなくても、赦されていない状態で生きるのは苦しいことだからです。心の奥にある自分を責める思いも、忘れたくても忘れられない後悔も、キリストが罪を代わりに背負ったのだから解決を任せるように、神様はずっと語りかけてくださったのだと思います。

私は最初、このことを信じるのが出来ませんでした。子どもの頃に言われた「ごめんて済むなら警察いらん」や、「謝るなら次はやらないで」という言葉が心に残っていて、「謝るだけで赦されるなんて、そんな都合の良い話があるわけない」と思い、同じ失敗を繰り返す自分に嫌気がさしていました。しかし、自分は自分の罪をどうすることもできないことを認めて、イエス・キリストを信じました。

信じた後は、前よりもっと罪を犯しているように感じてとても悩みましたが、それは自覚できる罪が増えたためだとわかりました。神様は、私が気付いていない罪も最初から知っていて赦してくださったとわかってからは、心から安心できるようになりました。今は、自分ではどうすることもできないことだからこそ、罪が赦されることは本当に幸いだと感じています。

「律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。」(ローマ5:20)

第3章 約束された救い主

はじめに

- ◆ あなたは、何か大切なものを無くしたことがありますか？それを捜し回って、捜し出したことがありますか？

先の第2章で、神の約束を破るという罪を犯したアダムとエバ。神と人間との関係は損なわれました。そして人間は、肉体の死、霊的な死、永遠の死という三つの死から逃れられなくなってしまったのです。ではそんな私たち人間に救いはないのでしょうか。

神の救いとイスラエルの民

実は、神は人間との関係を回復しようとしてくださいました。神は、約束を破り、罪を犯してしまった人間を救い出すため、神ご自身の民を選び出そうとされたのです。その代表がアブラハムという人です。神は、アブラハムとその子孫を通して世界を祝福すると約束されます。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなる者としよう。……地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」(創世 12:2-3)

アブラハムの子孫は後に、イスラエルの民と呼ばれるようになります。神は、神によって特別に愛された民がいかに生きるかを教えるために、イスラエルの民に「十戒」を与えました。出エジプト記 20 章 1-17 節にその全文があります。最初の戒めには「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。」(出エジプト 20:3) とあります。結婚した者が自分の愛を他の異性には注がないのと同じように、イスラエルの民も、神に特別に選ばれたゆえに、神だけを愛し抜くのです。

しかしながら、イスラエルの民はその歴史において、何度も何度もほかの神々を拝み、神を裏切ってしまうのでした。このように、神に従いきることのできない罪の性質は、イスラエルの民だけの問題ではなく、人間全体について言えることです。

あなたは、十戒の教えを守れますか。一つも破ったことはない、と言えますか。例えば十戒の最後の戒めは、「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。」(出エジプト 20:17) です。誰でも、他の誰かのものを欲しがったり、ねたんだりしたことがあるものです。聖書は「罪からくる報酬は死です」(ローマ 6:23) と言います。神の前に一つでも罪を犯したことがある者は、死ななければならないのです。

救い主（メシヤ）としてのイエス・キリスト

イスラエルの民の歴史を通して、人間が神に従いきることができないことが明らかにされていきました。けれどもそれと共に、神がアブラハムに約束された祝福は、イスラエルの民の中から生まれる特別な「救い主（メシヤ）」によってもたらされることもまた、明らかにされていきます。イスラエルの民はみな、この救い主の現れを待ち望んでいました。そしてこの救い主こそ、イエス・キリストです。

あなたはイエス・キリストという名前の意味を知っていますか。イエスが苗字、キリストが名前、というわけではありません。イエスとはヘブル語で「イエホシュア」、「主は救い」という意味です。またキリストとはヘブル語「メシヤ」のギリシャ語訳で、「油注がれた者」を意味します。旧約聖書の時代、王・祭司・預言者といった特別な聖職に任命される者は油を注がれました。

アブラハムを選び、全世界を祝福すると約束してくださった神は、ついに救い主イエス・キリストを遣わされたのです。約二千年前、約束された救い主イエス・キリストがこの地上に来られました。救い主の誕生を記念して祝うのが、クリスマスです。

イエスは人々の間で生活をし、人々に神の救いの知らせを語りました。これから、イエス・キリストがどのような働きをされたのかを、聖書から学びましょう。

ルカの福音書 19 章 1～10 節を読みましよう

イエスが生きていた時代、イスラエルの民を支配していたローマ帝国は、税の徴収のためにイスラエル人の中から「取税人」を立てていました。その取税人の中には、必要以上に取り立てをする者もいました。民衆にとって取税人とは、自分たちの生活を苦しめる悪い存在であり、しかも敵国ローマに加担する存在、さらに異邦人と常に接するという点で宗教的にも汚れた存在だと思われていました。

語句説明

- ・ 「いちじく桑」(4)：いちじくの仲間だが、大きくなると 10m にもなる。
- ・ 「アブラハムの子」(9)：アブラハムの子孫。
- ・ 「人の子」(10)：イエス・キリストが自分自身について使われた称号。

質問

1. 1～4 節によると、ザアカイとはどんな人だと思えますか。
2. 5～7 節によると、イエスと人々とは、ザアカイに対する呼び方や態度においてどのような違いがあると思えますか。
3. 9～10 節によると、イエスはどのような存在だと思えますか。

おわりに：救い主と私たち

かつて、アダムとエバは罪を犯し、エデンの園で探し回る神さまを恐れて隠れました（第2章参照）。そのように、神から離れている私たち人間を捜し出すために、イエス・キリストは救い主としてこの地上に来られたのです。失われた人を捜して回っておられるイエスは、アブラハムの子孫、すなわちイスラエルの民であったザアカイの元を訪れ、救い出しました。ザアカイを捜し出したイエスは、あなたのことも捜しておられます。イエスはあなたのことを愛しておられ、あなたの元に来てくださるのです。

ザアカイは、人々から人気があったわけでもありませんし、神の民イスラエルにふさわしい歩みをしていたようにも思えません。けれどもそんなザアカイは、イエスと出会うことによって、自分の罪に気付かされていったのです。こうしてザアカイは、神との関係が回復され、それと共に、周りの人たちとの関係も回復へと導かれていったのです。

神は、罪によって歪んでしまった人間と世界とを諦めてしまうのではなく、救い主イエス・キリストによって、それを本来のあり方へ回復しようとされたのです。そしてその救いは、歴史的なイスラエルの民だけではなく、全人類、全世界に及ぶものです。

それでは、イエス・キリストによる救いがどのようになされていくのか。人間を、その罪と死からどのように救うのか。その決定的な出来事を、第4章、第5章で学びたいと思いません。

◆ 今日の学びの感想を分かち合いましょう。

わたしの物語—約束された救い主

ペロイト大学 2016 年卒 Mさん

2015 年 1 月 25 日 受洗

沖縄で生まれ育った私は、教会や聖書と縁のない生活を送っていました。高校卒業後アメリカの大学に進学しましたが、無神論的な大学を選んだ私にできた親友たちが、学内でも珍しいクリスチャンでした。しかし大学最初の2年間は、お付き合いしていた男性だけが私のすべてでした。別れた後は生きている意味がわからなくなり、「愛など存在するのか」と悩みました。当時ルームメイトの親友は、毎朝5時に起きて部屋の隅で仏教の瞑想を試みる私を見て、「わかった、私も一緒に起きる」と言い、隣で黙って聖書を読み、祈るようになりました。そんな彼女に誘われて行った教会で、賛美を歌いながらなぜか涙が止まらなかった私は、以後毎週友人たちと教会に通うようになりました。寮のバイブルスタディにも参加し始め、生まれて初めて聖書を読みました。読めば読むほど「私は人も神も愛せない」と、自分の罪というものにじわじわ気付かされました。その学期が終わる頃、私は「神様、あなたを信じられないけど信じたいです」と祈るようになっていました。

半年後、4年生の秋に参加したIVCF（アメリカのK GK）の合宿で、私はイエス様を信じる決断をしました。それはずっと問い続けていた「愛とは何か」という疑問が解けたときでもありました。毎晩寝る時間も惜しまずに私の意地悪な質問にも聖書を開いて親切に教えてくれた親友の愛、私が1年生のときから陰でずっと祈ってきてくれた友人たちの愛、それらすべては彼女たちがイエス様に愛されているからこそ生まれる愛なのだと思いました。私の22年間のすべての醜い行いも感情も、神を信じられない弱さも、何もかもを知っていながら、なおも両手を広げて「わたしはあなたを愛している、わたしのところに帰っておいで」と呼んでくださっている神様の愛を拒否する理由が、もはや見つかりませんでした。二千年前にこの地上で生きておられたイエス・キリストは、私が本当の愛を知れるように、その愛のために永遠に生きることができるよう、すべてを捧げて身代わりとなって十字架で死んでくださったのだと思いました。十字架は、私たちの理性では理解できないほどの深い神様の愛のしるしでした。私の目の前には二つの道があり、私にはそれを選ぶ自由が与えられていました。一つは、イエス様の愛のうちに永遠に生きる道。もう一つは、イエス様と永遠に隔離された死への道。それはとても明白な選択でした。

「わたしはあなたを決して離さない」と約束してくださるイエス様がとなりで一緒に歩いてくださるこの喜びの人生を与えられたことを、私は今も毎日、心から主に感謝しています。

第4章 イエス・キリストの死

はじめに

第2章では、人間には「罪」という現実があり、それが神様と私たちの関係を傷つけ、そのために私たちと他の人たちの関係、そして私たちを取り巻くあらゆるものとの関係もまた、影響を受けていることを学びました。そして第3章では、イエス・キリストこそが私たちを罪から救う救い主であることを学びました。第4章では、その罪からの救いがどのようになされたかを学びます。

- ◆ 「救い主」あるいは「救世主」という言葉から、あなたはどのような人を想像しますか？（スーパーヒーロー、神、歴史上の人物の誰か…などなど）

救い主・救世主

「救い主」という言葉は私たちの日常生活ではあまり耳にしない言葉かも知れません。一方、小説やマンガの中で、あるいはスポーツ界においてなどでは、「救世主」という、同様の意味の言葉を耳にします。そして、ほぼすべての場合、その救世主は圧倒的な力で敵を打ち倒し、勝利をもたらします。

今日、私たちの周りには様々な悪の現実があります。大きな事柄では、戦争、難民、政治の腐敗、貧困、といった事柄があります。身近なところでも、家庭内の不和、友人関係のもつれ、差別や不当な扱い、小さいけれども確かに存在する不正など、悪はいろいろなところに広がっています。そしてそこには様々な苦しみがあります。

私たちはその悪の現実の中で、不公平だと思ったり、理不尽さを感じたりしながら、物事がきちんと正されることを願うのではないのでしょうか。正しいことをする人たちが、悪い人たちをやっつけてほしいと、どこかで願っているのではないのでしょうか。それはまさしく「救い」を求めている、と言えると思うのです。

悪の問題

けれども、考えてみましょう。悪を力でもって制するとしたら、そこで悪は終わるのでしょうか。戦争を引き起こしている悪者を銃で撃ち殺したとき、本当にそこで平和は訪れるのでしょうか。もしかしたら、その「悪者」にも家族や愛する人たちがいるかもしれません。その人たちが今度は敵討ちのために武器を手にするとしたらどうでしょうか。暴力が

暴力を、悪が悪を生み、暴力の連鎖が続いてしまうのです。

また「悪者」と誰かのことを言うとき、私たちは自分自身のあり方も問われます。自分は、相手のことを悪者と言えるほどの善人だろうか。同じような状況に置かれたら、自分も同じようにするのはないか。果たして、自分は相手と同じような「悪者」ではないと言い切れるだろうか、と。

イエスの十字架

この世界における悪の問題と真剣に向き合えば向き合うほど、私たちは自分の知恵や力では解決できない袋小路に入り込んでしまうものです。けれどもそこで、私たちは救い主の必要に気づくのではないのでしょうか。悪と暴力の連鎖を断ち切り、そこから救い出してくれる救い主。私たちを私たち自身の悪から救い出してくれる救い主。そして私たちを、正しく生きられるように導き、また失敗したときには赦しを与えてくれる救い主。聖書は、イエス・キリストこそそのような救い主だということです。

イエス・キリストは「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」（マタイ 5:44）と教えられました。イエスは、「愛」や「赦し」によって悪の問題に立ち向かうのです。その最たるものが、イエスの十字架です。イエスの十字架は、救いの中心にある出来事です。

ルカの福音書 23 章 32～49 節を読みましよう

イエスはエリコ（第3章参照）から旅をして、イスラエルの都エルサレムにやってきました。彼は最初、救い主として大きな歓迎を受けます。しかしそこでイエスは最も親しい友人の一人に裏切られ、自分と同じ国民であるはずのユダヤ人のリーダーたちによる裁判で神を汚したと不正に断罪されます。そして当時イスラエルを支配していたローマ帝国の総督に引き渡され、総督によって罪は認められなかったものの、彼を歓迎したはずのエルサレムの人々による強い圧力で、有罪とされ、極悪な政治犯として、当時最も残酷な刑だった十字架刑に処せられることになりました。

語句説明

- ・ 「どくろ」(33)：ギリシャ語では「ゴルゴダ」、ラテン語では「カルバリ」という。フィクションなどでも見られる「ゴルゴダの丘」という名称はここから。
- ・ 「ユダヤ人の王」(37, 38)：旧約聖書では、救い主はユダヤ人の王として来るはずであった。イエスはユダヤ人の王を名乗り、ローマ帝国支配の転覆を謀ったという罪で政治犯として処刑されようとしていた。
- ・ 「御国」(42)：神の国を意味する。イエスの時代、救い主が悪を滅ぼし、王として正義によって統治する神の国をもたらすと信じられていた。
- ・ 「暗くなって」(44)：神の裁きの象徴。
- ・ 「神殿の幕」(45)：エルサレムにあった神殿は同心円状の構造をしていた。一番外の庭にはユダヤ人以外の異邦人が、その中の庭にはユダヤ人の女性が、その更に中の庭にはユダヤ人の男性が、そしてその更に中の庭には祭司が入ることができた。一番奥の「至聖所」には、大祭司が神と出会うために年に一回だけ入ることができた。この至聖所の入り口には、そこを他の神殿の部分から隔てるために幕が掛けられていた。
- ・ 「百人隊長」(47)：ローマ軍における最下級の士官。
- ・ 「胸をたたいて」(48)：嘆きを表現する当時の習慣。
- ・ 「ガリラヤ」(49)：イエスの故郷。

質問

1. 32～38 節において、イエスの周りの人々はイエスに対してどのような態度を取っていますか。それに対する「父よ。彼らをお赦してください」(34 節) というイエスの言葉について、どう思いますか。
2. 39～43 節では、二人の犯罪人はそれぞれイエスに対してどのような態度を取っていますか。イエスは「悪いことは何もしなかった」(41 節) にもかかわらず、なぜ十字架に掛からなければならなかったのだと思いますか。1 ペテロ 2:22-25 も読んでください。
3. 「神殿の幕は真っ二つに裂けた」(45 節) ことには、どんな意味があったと思いますか。イエスの死の結果、神と人間との関係はどうなったと思いますか。

おわりに：イエス・キリストの十字架の意味

悪の問題は、人間の罪と深い関係があります。イエス・キリストの十字架は、人間の罪を赦すためのものでした。旧約聖書の時代、民の罪が赦されるために、動物が身代わりとしてささげられました。イエスの十字架とは、まさに人間の罪が赦されるための身代わりの死でした。イエスは罪を犯したことがなく、それは完全な犠牲でした（1ペテロ 2:22-25）。

イエスは十字架の上で私たちの罪をご自分の上に引き受けてくださいました。神の怒りを身代わりに受けたイエスは、肉体的に、霊的に、そして完全に死にました。第2章で見たように、人間が神に逆らったために受けることになった死という刑罰を、イエスが代わりに受けてくださったのです。そしてこのイエスの十字架のゆえに、私たちの罪が赦されるのです。イエスは罪からの救い主です。

神殿の幕が裂けたことは、神と人間との関係に道が開けたことを意味しています。道を開いてくださったイエスを通して、私たちは神に近づくようになりました。イエスの死は、壊れていた神と人間関係を修復するものでした。イエスの十字架によって、神と私たちの関係は大きく変化したのです。そしてそれは、私たちと他の人たちとの関係にも影響を及ぼすものです。

裏切られ、不当な裁判にかけられ、十字架に付けられたイエスは、「父よ、彼らをお赦してください」と自分を攻撃する者たちが赦されるように、父なる神に祈りました。そしてご自分では復讐をしませんでした。悪の連鎖を断ち切るには、赦しが必要です。

私たちもまた、神によって赦され、神に近づくようになり、神が自分とともにおられるということを知るとき、他の人を赦すことのできる者へと変えられていくのです。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

歴史の小窓—イエス・キリストの死

十字架はキリスト教のシンボルとして非常に有名で、芸術品やアクセサリーとして細工されたものなどもあるのでロマンチックなイメージを抱きがちかもしれません。しかし、イエスの時代の人々にとっては恐ろしく、忌まわしいものでした。十字架刑はローマ時代においてもっとも残酷だった処刑の方法で、あまりの残虐性のため、ローマ市民に対しては行われず、奴隷や外国人に対して、しかも重大な犯罪者を見せしめとして処罰するときに、まれに用いられました。1968年にイスラエル北部で発見された1世紀後半の墓からは、実際に十字架に掛けられた男のかかとの骨が発見されています。その骨には18センチほどの鉄の釘が埋め込まれていました。

十字架のもたらす身体的な苦痛の医学的な分析もされてきました。あるアメリカ人の医師が1965年にアリゾナ州の医学論文誌に寄稿した内容を中心に紹介します。

イエスはユダヤ教の指導者たちによって尋問された後、ローマ総督ピラトのもとに連れて行かれます。イエスはまずここで、むち打たれます。このむちは何本もの細い革で出来ており、それぞれの先端には鉛の塊が複数ついていました。羊の骨が埋め込まれていたこともあるようです。最初は打撲による内出血が起き、やがて皮膚が破れ、終わったときには背中が血まみれになります。

その後、イエスは十字架の横棒をかつがされて刑場まで移動しました。そこで手首に釘を打たれて横棒にはりつけにされます。今度は横棒が縦棒と組み合わされ、更に両方の足首を貫通するように釘が打たれて縦棒に付けられます。それから十字架が地面に立てられました。十字架が地面に立てられたとき、体重が前にかかるので、受刑者は両肩を脱臼し、呼吸困難になります。息をしようとする、体重を支えているのは手首と足首なのでそこに力がかかり、激痛を引き起こします。時間が経過するとともに疲労が蓄積し、両腕でけいれんが起き、さらなる痛みを引き起こします。心臓を取り巻く心膜に血清が満ち始め、心臓が圧迫されます。呼吸困難、激痛、体力の消耗の中で、受刑者はじわじわと死んでいきます。普通、死ぬまでに4～6日かかりました。長く生き延びた場合は足の骨が折られ、窒息死させられますが、兵士たちが6時間後にイエスの様子を確認したとき、彼は既に死んでいました。聖書には、兵士が槍をイエスの脇に突き刺し、血と水が噴き出したと記録されています(ヨハネ19:34)。これは心膜に満ちた血清で、イエスの死が窒息死ではなく、心不全などによるものだったと考えられます。

このように大きな身体的、精神的苦痛を、そして父なる神様との交わりが断ち切られる霊的苦痛を、イエスは十字架の上で、私たちのために味わったのです。

第5章 イエス・キリストの復活

はじめに

第4章では、イエス・キリストの十字架の死について学びました。十字架の上でイエスは人間の罪を負い、身代わりの死を遂げました。そのことによって、人間の罪は赦され、神と人間の関係が回復する道が開けました。この第5章では、イエスが死んでから、一体何が起きたかについて学びます。

- ◆ あなたにとって「死」とは、どのような意味がありますか？
死に対して、どのような感情を抱きますか？死んだらどうなると思いますか？

死んだ後

死は、どんな人にも必ず訪れます。ある人はそのことを、唯一確実な確率だと言いました。古代中国の皇帝たちの中には、不老不死の薬を求めた人たちもいます。どんなにこの世界で長生きをしても、成功しても、富や人気を得ても、人間は必ず死に、そして死んだとき、そのすべてに別れを告げるのです。

それでは、人間は死んだ後どうなるのでしょうか。日本の仏教には輪廻転生の教えがあり、今の人生でどのような生き方をしたかによって、来世でより優れた存在になるか、より劣った存在になるかが変わってきます。イスラム教では、地上でどれほど良いことをしたかに応じて死んだ後の行き先が変わります。無神論だと、そこにあるのは無だけです。

死んだ後についての考え方はとても重要です。なぜなら、それが今の生き方を変えるからです。もし仏教やイスラム教のように、今をどのように生きるかによって死後の行き先が変わるなら、私たちはそれを少しでも良くするために必死になるでしょう。そして、物事がうまく運んでいるならそのことを誇り、うまくいっていないなら絶望するかもしれません。そのような考えは、宗教的により優れた階級と、そうではない階級とを生み出します。

一方もし死後には何もないと考えるなら、私たちが今どのように生きるかは、どうでもよいことになります。すると、私たちはただ自分の満足と納得のためだけに生きるでしょう。もしすべての人間が自分の満足と納得のためだけに生きようになったら、力のある者が弱者から奪うことが正当化される世界になるでしょう。弱い者たちは絶望し、無意味な人生を自ら終えるかもしれません。あるいは、暴力でもってのし上がろうとする輩が出て来るかもしれません。

死に勝利

それでは、聖書の語る死後の世界はどうでしょうか。聖書は、イエス・キリストが、私たちの罪が赦され、神との関係が回復するために、身代わりの死を遂げられたと語ります。そして、彼を信じる者たちが永遠に生きられるように、三日目によみがえられたといえます。イエス・キリストを信じる者は「ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つ」（ヨハネ 3:16）と書いてあるとおりです。

聖書によれば、人間は本来、死ぬべき存在ではありませんでした。しかし、アダムとエバが罪を犯した結果、死がこの世界に入りました（第2章参照）。この死刑判決は、アダムとその末裔である私たちすべての上にふりかかっています。イエスが十字架の上で死んだことは、この死刑判決を私たちの身代わり、また代表として受けられたということでした（第4章参照）。

刑は一度執行されたら、二度は執行されません。その力を失います。イエスが死んだということは、死がもはや力を失ったということです。そしてイエスは、死から復活されて、死に勝利しました。復活は、ただ息を吹き返したことは違います。イエスはもはや決して死ぬことのない、栄光の体をもってよみがえられたのです。そして、イエスを信じる人々も、一度は死ぬものの、やがて同じように栄光の体を持ってよみがえり、神とともに永遠に生きるのです（1コリント 15:20-22）。

イエスの復活を信じて生きることは、宗教的アプローチとも、無宗教的アプローチとも大きく異なります。まず、死に勝利にしたのは私たちではありません。イエスです。宗教的アプローチとは違い、私たちは自分たちの立派さで死から救われるわけではありません。イエスが私たちのことを愛して、身代わりに死んでよみがえることによって、死を打ち破ってくださったのです。

また、無宗教的アプローチとも違い、どのように生きるかには意味があります。信じる者は、復活したイエス・キリストがともにいてくださるので、彼に感謝して、彼が喜ぶように、彼から力をいただいて、彼とともに歩んで今を生きます。

このようなクリスチャンの生き方と死に対する態度は、すべてがイエス・キリストの復活にかかっています。しかし「イエスは復活した」と言われても、信じがたいことでしょう。それはイエスの時代もそうでした。なかなか信じることの出来なかった一人の人の姿から考えてみましょう。

ヨハネの福音書 20 章 24～29 節を読みましょう

イエスはエルサレムで十字架に掛けられ死にました（第 4 章参照）。イエスの体は、アリマタヤのヨセフという裕福な人に引き取られ、彼が所有していた墓に葬られました。当時の墓は岩肌穴に掘ったもので、埋葬とはその中に遺体を安置することでした。イエスの死んだ金曜日の夕方、イエスの体は墓に埋葬され、墓の入り口には大きな石で封印がされました。土曜日は安息日（十戒の第 4 戒に基づく、週に一日の礼拝と休息の日）だったため、当時の戒めに従い誰も出歩きませんでした。そして日曜日の朝がやってきました。最初に、イエスと一緒に旅をして来た女性たちが墓を訪れました。そこで彼女たちは、空になった墓を発見しました。さらに彼女たちに天使が現れ、イエスは復活したと言いました。その頃、弟子たちはローマ兵たちを恐れて隠れていましたが、彼らの所に復活したイエスが現れました。

語句説明

- ・ 「デドモ」(24)：双子という意味。
- ・ 「そのわき」(25)：イエスは十字架に掛かれたとき、死んでいるのを確認するために槍で脇腹を突かれた。
- ・ 「八日後」(26)：当時の数え方では、起算する日も数に含める。ここでは日曜日にトマスと他の弟子たちのやりとりがあって八日後なので、一週間後の日曜日である。
- ・ 「主」(28)：新約聖書において「主」という言葉は、一般的な敬称の他、神の称号としても用いられる。

質問

1. ほかの弟子たちが「私たちは主を見た」(25 節)と言ったとき、トマスはどのような気持ちだったと思いますか。
2. イエスのトマスに対する関わり方から、どんなことがわかりますか。
3. トマスの言った「私の主。私の神。」という言葉には、どういう意味があると思いますか。トマスはどのような気持ちでこの言葉を発したと思いますか。

おわりに：信じられない思いに応えるイエス

トマスは最初、イエスの復活を信じるできませんでした。しかし、彼が自分の信じられない思いを言葉にしたとき、イエスはそれに応えてくれました。そのとき、トマスは「私の主。私の神」と言って、よみがえったイエスを信じ礼拝したのです。

イエスが死から復活したことは、神が死に勝利したことを意味しています。イエスの死と復活は、罪と死の支配から、人間を、そして全世界を救い出すためのものでした。そして神がイエスを死から復活させたことによって、イエスが確かに約束された全世界の救い主であることが明らかにされました。

イエスの復活は、私たちにとって大きな希望です。それは死んだ後にまたよみがえるときがやってくるという希望です。この希望は、私たちの今の生き方を変えるものです。イエスが死んでよみがえることによって、人間の救いの道が確かになりました。私たちは、神との関係が回復することによって、神を愛し、神に従っていく生き方へと導かれます。

さて、これまでの学びを通して、あなたにとって信じるのが難しいと思えることは、どのようなことでしょうか。トマスがイエスに自分の思いを伝えたように、あなたもイエスに何かを伝えたいとしたら、それはどのようなことでしょうか。

- ◆ これでこの学びは終わりです。いつものように、今日の感想を書いて、話し合みましょう。またこの学び全体も振り返ってみましょう。この聖書研究を通してどんなことを新しく発見しましたか。新たにどんな疑問が生まれましたか。自由に分かち合ってみてください。

歴史の小窓—イエス・キリストの復活

イエスの復活は多くの人々を困惑させてきました。「弟子たちは幻を見たのではないか」「弟子たちが遺体を持ち去ったのではないか」「イエスは十字架では完全に死んでおらず、息を吹き返したのだ」「イエスは弟子たちの心の中に生きているのだ」など、イエスが肉体を持ってよみがえったという聖書の記述を、何とかそれ以外の方法で説明しようという試みがされてきました。

にもかかわらず、イエスの復活はキリスト教の宣教において中心的な位置を最初から占めていました。使徒パウロはこのように言いました。「キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。」(1コリント 15:14) イエス・キリストの復活がなければ福音のメッセージは成り立たないとパウロは言っているのです。

それでは弟子たちは幻を見たのでしょうか。しかし弟子たちは、漁師のような地に足のついたタイプの人々で、幻を見るような夢想的なタイプではありませんでした。また、イエスは弟子たちとともに40日ほど一緒に過ごした(使徒 1:3)とも、食事をした(ルカ 24:42)とも記されています。それほど長く見え続ける幻はないでしょうし、食事をしたということは、肉体があったことを示しています。見たのも一人や二人ではなく、十人以上の人々です。五百人以上がイエスの復活を見たという記録もあります(1コリント 15:6)。

では弟子たちは遺体を持ち去ったのでしょうか。弟子たちはその後、福音をローマ帝国中で宣べ伝え続け、そしてそのために迫害にあい、最後は殉教の死を遂げました。彼らの宣言したことの中心には、イエスの復活がいつもありました(使徒 2:24)。もし復活が嘘だったとしたら、どうして彼らはそうまでして声高に復活を宣べ伝えたのでしょうか。彼らに何の得があったのでしょうか。イエスは弟子たちの心の中で生きているということに過ぎないのだ、という主張にも、同様の無理があります。

あるいはイエスが息を吹き返したのでしょうか。しかしローマの十字架刑がどれほど苛烈であるかを考えると(第4章「歴史の小窓」参照)、この説にも無理があります。ましてや、むち打たれて、傷だらけで、消耗しきったイエスの姿を見たことが、彼らに迫害を受けてなおイエスの死と復活を宣べ伝える勇気や希望を与えたとはとても思えません。むしろ、死と罪に勝利した、栄光の姿で彼らとともにいたことが、弟子たちに復活の希望をはっきりと与えたのではないのでしょうか。

現存する史料をもとに様々な可能性を検討していくと、最後に一番有力なものとして残るのは、「復活」なのです。復活の出来事は、イエスが本当の救い主であり、イエスのもたらす救いが、人間と世界の抱える最も大きな必要に応えるものだと言うことを、私たちに伝えています。

おわりに

これまでの全部で5回の学びを通して、キリスト教についての理解を深めることができましたか。聖書をもっと読んでみたいと思っているかもしれません。

ここであなたに考えてもらいたいことがあります。

先ほど開いたヨハネの福音書 20 章 27 節で、イエス・キリストは「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と言っています。あなたはこれまで学んできた聖書のメッセージにどのように応答しますか。

聖書の神様は、ご自分とあなたとの関係が回復することを、心から願っておられます。罪のために神様とあなたとの関係が壊れたままになっているからです。そして神様は、その関係を回復するために、約束された救い主イエス・キリストを地上に送られました。イエス・キリストは、あなたの罪が赦されるために十字架で死に、あなたに永遠の命を与えるためによみがえられました。

あなたも、このイエス・キリストを自分の救い主として信じてみませんか。

父なる神様は、あなたが戻って来るのを今も待っておられます。

信じるのも、信じないのも、あなたの自由です。

誰もそれを強制することはできません。

人生において、重要な決断の機会は、決して多くはありません。

あなたが、その大切な機会を逃してしまわないようにと願っています。

今はまだ決断できないけれど、もっと聖書を読んでみたい、学びを続けてみたいという方は、別のブックレットを用いて、また一緒に学べたら嬉しく思います。

人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか」と言った。

そこでペテロは彼らに答えた。

「悔い改めなさい。

そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。

そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。

なぜなら、この約束は、

あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」

ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい」と言って彼らに勧めた。

そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。

その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。

使徒の働き 2:37-42

『WITH』は、あなたの大切な友人と一緒に聖書を読むための本です。

あなたがその友人との聖書の学びを通して、
実は神様がわたしと一緒にいてくれるんだと、
そう信じていることができたなら幸いです。

God be with you.

WITH

発行日：2017年2月

監修者：吉澤慎也

著者：小川真・鎌田泰行・吉澤慎也

発行者：キリスト者学生会

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 3F

03-3294-6916 / office@kgkjapan.net

